

# 「ぶんせき」誌 40 周年，通巻 480 号を 迎えて



加藤 信子

「ぶんせき」誌は 1975 年にそれまでの会誌「分析化学」が論文誌「分析化学」と機関誌「ぶんせき」に分かれ、別冊分析化学進歩総説も引き継いだ形で誕生し、本号をもって通巻 480 号を迎えました。40 年の歴史を紡いできたことになりま。創刊当時の歴代編集委員長、編集委員の方々、また執筆下さった方々のご努力により、幅広い読者の要望に応えてきた賜物と感謝に堪えません。本年度から編集委員長を仰せつかって、この歴史を継承していく重責を感じています。

ところで、私は 1996 年度から 1998 年度までの 3 年間編集委員、編集幹事を務めましたので、15 年ぶりに「ぶんせき」編集の場に戻ってきたことになります。当時の「ぶんせき」誌をひも解いてみると、入門講座、展望、解説、講義、進歩総説といった構成は同じで、一見すると全く変化がないように思われます。しかしながら、これらは創刊当時から続いているとのことであり、これだけの長い期間継続できていることは、その時々<sup>あかし</sup>に時宜を得た企画がなされてきたこと<sup>あかし</sup>であろうと思われま。一方で、情報社会の発展を反映して“ニュースプラザ”、“タイトルサービス”が姿を消し、新たに“リレーエッセイ”が加わって、会員相互の交流の場が生まれ、少しずつですが、変化しているのが分かります。A4 判になったこと、カラーページが増えたこと、加えて学会ホームページに「ぶんせきアーカイブ」が設けられたことは「ぶんせき」にとっては大きな進展と言えるでしょう。

さて、これからの「ぶんせき」には、何が求められているのでしょうか？ 分析化学・分析科学がかかわる世界は極めて広く、最近では、本年 10 号の特集「東日本震災後の環境変化の評価と分析技術の進展」に見られるように、社会とのかかわりもますます強くなってきています。企業で分析業務に携わってきた中で、私は「分析」を「技術的課題解決のために、構成している物質の成分・量・存在状態を明らかにして、これらを再構成し、物質の本質や現象を総合的に解明すること」と定義してきました。これを達成するためには、分析の基本となる原理などの基礎研究、分析法や装置の開発、分析を用いた応用研究など幅広い分野での研究や、それを支える確実な技術が求められます。材料科学、農学、医薬学等々の横の<sup>ひろ</sup>拡がりにも<sup>こた</sup>応えていかなければなりません。

本稿を執筆しているのは 9 月ですので、就任から半年が過ぎようとしています。引き継ぎ当初は前期の編集委員会の企画を引き継いでいますので、これからが本年度の編集委員会の腕のみせどころといったところです。編集委員会を活発な議論の場として、機関紙としてのあるべき姿を改めて論じ、時代にふさわしい、また、分析化学の発展に貢献し続ける「ぶんせき」を目指したいと願っています。会員、読者の皆様からも積極的なご意見を賜りますようお願いいたします。

〔Nobuko KATO, (株)ブリヂストン, 「ぶんせき」編集委員長〕